
それなりに上手くいっていた人生でした。

怠けMONO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それなりに上手くいっていた人生でした。

【Nコード】

N1159Y

【作者名】

怠けMONO

【あらすじ】

目を覚ますと、そこには男の娘がいました。それなりに満足していた人生をやり直すことになった主人公が、新しい人生を楽しく過ごすようと頑張ります。

* 原作を知らずに、衝動的に書き始めた駄文です。

第一話（前書き）

どうも初めまして、駄文ですがよろしく願います。

第一話

それなりに上手くいっていた人生でした。

わりと勉強ができ、平均より高い運動能力をもち、多くの友達ができ、楽しい人生でした。

大学に進学し、やっと明日から20歳になると感傷に浸りながら眠りについたはずでした。

・・・ここはどこですか？

目を覚ますと、体は動かない、頭は熱くて痛い、声は出ない、ないない尽くでした。

それでもあまりの辛さにジタバタしていると、扉の開く音と誰かの足音が聞こえました。

音のした方を霞んだ視界に収めると、そこには長い黒髪の美人らしき人が見えました。

あなたは？と声を発しようにも声が出ず、近寄ってきた人に抱きかえられると疑問に思ったことがあります。

抱きかかえられる？

20にもなる大人が？

そんな疑問を余所に、その女性は私を抱きかかえるなり車に乗せ、近くの病院へと直行し、私は流されるまま待合室に座り、お医者様に見てもらい、薬をもらって再び家に帰って、寝かせられました。

その間、女性は私に向かって「大丈夫？」「どこが悪いと言える？」など心配そうに尋ねてきましたが、私の熟練のその場に合わせて流す技術により問題ありませんでした。

その後、お粥を食べさせてもらい、薬を飲んで寝てしまいました。

次の日、カーテンの隙間から日差しが差し込み、スズメが鳴いており、まさに絵に描いたようないい天気だなあと思いながら目を覚ましました。

薬が効いたようで随分楽になり、周りのことをきちんと認識できるようになりました。

私はふと目についた鏡を這いつくばって取って見ると、そこには白髪が肩ぐらいにまで伸びた目の赤い男の娘が映っていました。

・・・誰やねん

いやあ、どうやら私はまだ夢の中ようです。

ええ、あんな男の娘なんているはずがない。まして自分は自他ともに認める三枚目でしたので、そんなはずがあつてたまるものか！

こついう時はお約束通り、寝れば夢から覚めるのです！

ほっぺは抓りませんよ。現実逃避ではないのです！

これは戦略的撤退なのです！
↑？

しかし、あんなのが実際にいたらホルモンバランスが相当崩壊しているんでしょうね、あはははは。

と再びベッドに入り、目を覚まそうとした時、部屋の外から足音が近づいてきました。その誰かは部屋の扉を開けるなり、

「あかね緋音大丈夫？」
「あかね緋音生きてるか？」

とこちらに尋ねてきました。

ええい！邪魔するでないわあー！

私は大人へと変身する（20歳になる）ために起きるんじゃない！

心の中でシャウトしながら、もう一度寝ようと試みました。

「起きられるようになったか？」

「よかった、昨日急に熱を出したから心配したのよ？せつかくの3歳の誕生日だったのに、残念ね。」

へえー、そうなんですか。それじゃ、って乱暴に撫でないで下さいよ！痛いじゃないですか！

そんな態度が顔にでていたのか男の方は苦笑しながら手を引込め、女性と一緒に部屋を出ていこうとします。

「じゃあ、後でお粥とお薬持ってくるわね。」

はいはいわかりましたよ、お母様。

そして、二人が部屋から出ていき、扉が閉まると私は天井を仰ぎ、理解してしまったために自然とため息を吐いてしまいました。

現実か・・・orz

第一話（後書き）

ありがとうございました。

第二話

どうも！白峰緋音でッス！

いやあゝあれからは大変でしたよ。

（認めたくない）現状理解から始まり、この体に残っていた記憶を思い出しながら、日々を何とか過ごしてきましたよ。

アルビノというハンデを抱えていましたが、そこは元大人の精神のため、物静かに読書を嗜んでいました。

外に出るときは、サングラスをかけ、日傘を差し、肌を出さないようにしたりするのは大変でしたが特に問題はありませんでした。

両親が悪ふざけでコスロリの女装を強制したり、知り合いを呼んで撮影会を始めたり、外に出たとき男の子に男女とからかわれて、両親が切れた上にその子の親まで怒り出し、なぜか私がその子を弁護する羽目になったり―（その子とは親友になりました）……………

問題はありませんでした！

でも、不思議の塊みたいな私が言うのもなんですが、日本ってこんなに不思議なところでしたっけ？

ドでかい西洋を思わせる町に始まり、あっちこっちを見れば髪の色がレッド、ピンク、ブルー、ブラウン……………

さらには、あっという間に絡んできた不良を鎮圧するダンディー―

（ですめがね？とか恐れられていました）がいるわ、コンビニの近くで古い制服をきた何だか生気の薄そうな女の子を見かけたり、ギネスをはるかに超えるであろうでっかい木（ばんとうとかいうらしいです）に図書館島とかあったりと前世―（？）とのあまりの違いに自分が変なのかと悩んだりもしました。

そこで色々と気心の知れた心友―（レベルアップ！）に話してみると、顔が笑っているのですが、微妙に汗をかいた表情で、

「だ、大丈夫だよ！」

と何が大丈夫なのか全く分かりませんでした。その必死さに免じて今回は見逃してあげましょう。

・・・そのため息は何ですか？

第二話（後書き）

ありがとうございました。

第三話

私も今日から小学生！

そして、今日は入学式！

小っちゃい子が溢れかえり、泣き喚き、先生方が大きな声でなんとかまとめようとしていますが・・・

うん、カオスですね！

この中に混じっていかなきゃと思うとため息がでそうですが我慢我慢。

すると隣からため息が聞こえてきました。

おやおや、そんな人生に疲れたおっさんがするようなため息をするのはどこの誰ぞ？と興味を持ってそちらを見ますと、そこには・・・

人生に疲れた雰囲気的美少女がおりました。

すごいですね、傍から見ていてすぐわかるくらい疲れていますよこの少女。

眼鏡をかけており、長い赤髪を後ろで括り、これから入学する麻帆良小学校の制服に身に着けた少女は、どんよりって表現が相応しいくらい沈んでいました。

そのまま観察していると、その少女がこちらの視線に気づきました。

「何だよ、人のことじろじろ見て？」

おおっと、なんかピリピリしてますよこの少女。
とりあえず、あたりさわりのない挨拶でもしましょう。

いやゝ、初めまして。こんにちは。隣から妙に疲れたため息が聞こえたもんで、気になっちゃったんです。

「誰が少女だ！って、そんなことより、わ、私って変なのか？」

あれ？なんか怒った上に、ビクビクしだしましたよ？

これは不味い！

何が不味いつて私は体は男の娘ですが、精神は元大人！ ↑重要

そう、つまり私は紳士（笑）！紳士（笑）であるべきなのです！

いやいや、何をおっしゃいますかウサギさん。あなたのような美少女は中々いませんよ？（あれ？そーいやこの土地美人多くね？）もっと自分に自信を持ってください。ね？（サングラスを外して、スマイル〜）

「あ、ああ。ありがとう・・・／＼／」

ふう、どうやらごまかせたようですね。なんか顔がちょっと赤くなっちゃいましたけど、周りの男子も何人か赤くなってますけど、無問題！

「な、なあ、よかったら式の後で話さないか？」

もちろんですとも！あ、でも私の友達も一緒にいいですか？今いませんけど、後で合流するんです。

「ん・・・、まあ、いいよ・・・」

よし、ちょっと不安そうですが大丈夫でしょう。さて、式も始まるようですし、きちんと座っていきましょう！

さすがに、ぬらりひょんが実在したのには驚きを隠せませんでした。

後、幼女に懷かれました。

第三話（後書き）

ありがとうございました。

第四話

どうも、緋音です。

例の幼女（長谷川千雨ちゃんという名前らしいです）がお友達になつてから、一年が経ちました。

あの式の後には、私が男だとわかると突然キレだしたことを除けば、順調に仲良くなれました。

我が心友とも問題なく仲良くなれましたが、どうも他の子達とは話が合わず、三人組で行動することが多かったです。

私の体が弱いため、あまり激しい遊びができず、屋内で遊ぶことが多かったですが、思い返せばなかなか濃い出来事が多いですねえ。

私の格好に対するいじめが起きたり（翌日いきなり震えながら謝られたので驚きました）、私と千雨ちゃんのコスプレ写真撮影会が親主催で開かれたり（心友はいち早く逃げ出しました）、千雨ちゃんと麻帆良は変だねと話し合ったり（隣で聞いていた心友が冷汗を流していた）、心友がバレンタインで何人かの女の子にチョコをもらっているのをニヤニヤしながら眺めたり、校内ランキングの美少女部門（低学年）の上位に私の名前があると聞いて落ち込んだり、色々ありました。

残念ながら、今の体では外で走り回れなかったので、大人しく過ごしていることが多かったですね。

そうでなくても、あの子供達のパワーにはついていけなかったでしょうが・・・

サングラスやUV対策なしに外に引つ張り出されそうになった時は、泣きそうになりました・・・・・・・・オソトコワイオヒサマコワイ・・・・・

さらに一、二年が経過したあるいい天気（曇り）の昼下がり、私はふと言葉にしました。

そうだ、図書館島に行こう。

その言葉を聞いた二人の反応は、

「あそこかゝ、なんか凄いらしいからな。行ってみようぜ！」

と心友が乗ってきたのに対し、

「罨とかあるんだろ？危ないから止めないか？」

千雨ちゃんはあまり乗り気ではないようです。嫌そうです。

話によると地上部分は安全ならしいので、ちょっと説得すれば地下には絶対に行かないという約束の下、放課後に図書館島散策ツアーに行くことが決定しました。

何か新しい出会いがあるといいですね♪

第四話（後書き）

ありがとうございました。

番外編 1（前書き）

入学式後の出来事です。

番外編 1

・入学式の後

「千雨ちゃん、お待たせしました。あ、こいつは私の心友の宮^み部^{やべ}翔^{しょう}です。」

「俺のことは翔^{しょう}って呼んでくれたらいいから、よろしく。」

「（親友ねえ）初めまして、長谷川千雨です。男女で仲いいんだな？」

男の子2人はにこやかに挨拶をし、女の子は少し愛想に欠けるが挨拶を返す。

「あはは、何言ってますか千雨ちゃん。私、男ですよ？」

そっとうと千雨ちゃんの顔が引き攣り、紹介された方の男の子も笑顔を引き攣らせ、「ああ、またか。」みたいな顔をした。

「や、やつと普通に（髪白くて、目が赤いけど）仲良くなれそうなやつに会えたかと思ったのに……」

「？ 千雨ちゃん？」

男の娘がどうしたのかと近づくが、女の子はビンタをかましながら叫ぶ。

「お前もかー！」

「（バチーン！）へぶっ……ち、千雨ちゃん？　ちよっ、千雨ちゃん！」

女の子は泣きながらどこかへと走って行き、男の娘は追いかける。

男の子はいろんな意味で取り残されてポツーンと立っていた……

・

ちなみに、仲良く手をつないで戻ってきたときの女の子が嬉恥ずかしそうにしていたのを見た男の子が、心友をぶん殴ったのは仕方のないことだろう……

第五話（前書き）

作者は原作を知らないので、捏造しまくるでしょうが勘弁してください。

第五話

図書館島。

それは麻帆良湖に浮かぶ（浮かんでないよね？）世界最大規模の巨大図書館。

2度の大戦の戦火をさけるため、世界中から様々な貴重な本が集められてできたそうです。

蔵書の増加に伴い地下に向かって増改築が繰り返されたために現在では全貌を知るものはいらっしゃらないそうで、その実態を調査する中・高・大合同サークル「図書館探検部」なる部（地下に罫を仕掛けていることを考えると、どえらいハードな部活動ですね？逆に迷惑なのでは？）も存在していると聞きました。

（wiki参照）

・・・なんでやねん。

おおっと、すみません。あまりの出鱈目さに意識が飛んじやってましたよ。

。爆とか落とされるような国になんで世界中の貴重な本が集まるんでしょーねー？

となりで千雨ちゃんも一緒に突っ込んでますよ！（心友はなんかハラハラしてますね？）

地上部分は安全らしい（というか図書館に安全じゃないところがあるのがツツコミどころですよね？）ので、見て回りましょう。

ほらほら、千雨ちゃんもしょーくんも行きますよー！

いやー、これだけ広くて高い建物にあるだけでもものすごい蔵書量ですね？

迷子とかでないのかな？

どうせだから皆で手を繋いでいきますか？

「いや、俺はいいよ。千雨ちゃんと繋いだら？」

「ばっ、馬鹿言うんじゃないよ！手なんか繋がなくても大丈夫だよ！」

あら？そつですか？残念ですね。

最近片手（日傘を持たない方）がさみしいな、とまっていると、

おどおどした様子が庇護欲をそそる、前髪で目が隠れた少女を発見しました。

おや、これはいけませんね。

紳士（笑）たるもの困った女性には手を差し伸べねば！

ということで、さっそくアプローチ開始です！

「（また新しいフラグか？）」

「（むっ……。いや待て、そう、緋音は人助けが好きな奴なんだ。だから問題ない。あれ？じゃあ私も……。）」

後ろの呆れと怒りと悲しそうな空気はスルーして、

こんにちは御嬢さん。何かお困りですか？私でよければ喜んで手を貸しますよ。

私に気づいた少女はビクツと小動物的^{かわいいなあ}反応をしながらもこちらに向き、「ひうつ」つと鳴いて一歩下がりました。

あれ？おかしいな？

目から何か熱いモノがでてきそうです。私何かしましたか？その反応は悲しくなるんですけど……（少しいじめたくなったのは気のせいです！）

「え……っあ、あの、すみません。その、ちょっと（サングラスとか白い髪とかに）びっくりして、あ、その……」

……ぐはっ

クッ、こんなところでこんなモノ（皆で協力して守っていくべきモノ）に出会うとは……

人生何があるか分かりませんね。

後ろの怖い視線には気づきません。ええ、ス「おい」ルー不可能でした。

「結局どうだったんだ？その子迷子なのか？」（しょーくんナイス！）

今聞くところですよ。

ええ、だから千雨ちゃん、その固く握った拳をひらいてください。

「なるほど、ビンタがいいのか。」

断定しないで！まず叩くことを選べ「あのー・・・」あ、放置してすみません。

それであなたはど・・・

我ながらいい反応ができたと思います。

私たちを横切った台車が倒れてきて、その上に積まれていた段ボールの山がこちらに倒れてきたんです。（反対側からふぎけて走っていた男子がぶつかったからだそうです。ちなみにその子は無傷）

近くにいた千雨ちゃんをしょーくんの方に突き飛ばし、ついで迷子（？）の女の子を反対方向に勢いよく突き飛ばし、逃げ遅れた私は腕で頭を庇うようにして衝撃に備えました。

・・・（フワッ）・・・ドサドサドサつと物音がして、待つこと数秒・・・あれ？痛くない？

目を開けてみれば迷子（？）の子は目を回し、千雨ちゃんにこちらを見えないように抱いて距離をとっていたしょーくんは目を見開いて驚愕の表情を浮かべ、台車を押していた人は目を覆っており、知らない男の子が台車のそばで転んで痛そうにしていました。

あれ？私って運がよかったんだなー、っと思っでしょーくんの方を向いたら、

「千雨ちゃん、悪いけどあの子見てもらっていいかな？ちよつと緋音保健室につれていくから。ほら、いくぞ！」

「わ、わかった。」

冷静なようで焦りながら、しょーくんは私たちに指示をだし、私の腕をつかんで駆け出しました。

ちよ、しょーくんストップ、ストローップ！携帯取り出して話始めん

第五話（後書き）

ありがとうございました。

第六話（前書き）

ちよつと無理やりな感じですが、独自路線でいってみようと考えています。

主人公はちゃっかりチートでした。

第六話

「ふおっふおっふお、君が魔法を使っただけじゃよ。」

麻帆良学園本校女子中等学校の学園長室、私はそこにいます。

私の他には、目の前に学園長まほろが机に座っており、隣でしょーくんの
師匠だとかいう人が報告して、私の側にこちらをちらちら見ている
しょーくんがいます。

その後、しょーくん（その後、肉体言語でOHANASHIしました）の師匠（高校の先生らしいです）と合流し、この場所まで連れられてこられました。

悪いことなんてしてないのに、悪いことしたみたいでびくびくして
いましたが、とりあえず聞いてみました。

あのー、なんで私はここに連れてこられたんですか？

笑顔です。ひきつつっているかもしれませんがとりあえず笑顔で尋ねました。

それに対する返答が、最初の言葉でした。

本来なら、この人頭大丈夫かな？とか思うんですが、私は自分でも理解できていない不思議な体験をとっくの昔に済ませていましたし、この土地が変なのはわかっていたので、すんなりと受け入れました。

ええ、学園長めうりひょうんがいうんだから説得力ありますよね！

「なぜか釈然とせんが、とりあえず魔法が実在することは理解してくれたかの？」

理解しましたよー。バッチリです。妖怪が魔法ってどうよ？とも思わないですが、現状把握です。

でも、できれば実際に見てみたいんですけど？

「じゃあ俺が見せるよ。プラクテ ビギ・ナル “火よ灯れ（アールデスカット）”」

ボッ

おお、火ができました！

夢がありますねー、ファンタジーですねー。しょーくんも使えるんですね。いいな。

「ふおつふおつふお、魔法は秘匿されており、本来なら一般人にばれたら黙っていてもらうか、記憶を消させてもらっているんじやが・・・」

なんか物騒な言葉が聞こえましたけど・・・ああ、私が使ったから問題になったんですね？

・・・使ったんですか？自分じゃよくわからないんですけど？

「お主の隣にいる宮部くんが、お主が風の魔法らしきものを使ったのをちゃんと見たそうじや。」

そうなんですか？

「ああ、緋音に魔力があるのは分かってたけど、魔法を知ってるようでもないからびつくりしたよ。」

ふーん。そんな簡単に使えるもんですかね？さっき杖もって呪文唱えてましたけど？

「そこじや。」

へ？

「儂からみてもお主はそんなに魔法の才能があるように見えない上に、杖のような触媒をもっているというわけでもない。なぜじゃ？」

「いやいや、知らないですよ？プロにわからないものをどう説明しろと？」

魔法、魔法ね？風がでたんですよ？どうやって？うん？

風よ！な〜んちゃ・・・

その日、帰宅中の生徒たちは学園長室の全窓がぶっ飛んだのを目撃した。

第六話（後書き）

ありがとうございました。

第七話（前書き）

魔法の解釈が間違っていたらすみません。

第七話

居づらいです・・・ものすごく居づらいです。

部屋の中はぐちゃぐちゃで、机や椅子はひっくり返り、壁に傷がつき、窓は大破。そして私以外の皆さんの恰好はよれよれで、不機嫌そうな表情を隠そうとしますが、怒りマークがはっきり見えます。

「それで・・・どうやら君は風を操れるようじゃの?」

いえいえそんなことできるわけないじゃないですか!?! ちょっと言ってみただけですよ。言っただけなんですよ!

「じゃが、この現状をどう説明するのかね?」

「そうだぞ! さっきものすごい風だしたじゃねえか!?! 壁に頭ぶつけてコブできたんだぞ!」

ちょ、タンマ、そんなに揺すらないで下さいよ。と、とりあえず落ち着きましょう!

えーっと、さっきの言葉は言わない方がいいですかね？

「そうじゃな・・・（言霊？いや、それじゃと今まで何もなかったというのはいえん。無詠唱魔法だったとしても、あれだけの風を起こした後で彼の魔力が減った様子はないしのう？ふむ？）」

うわー、どうしましょ？向こうで話し始めちゃいました。

私っていつ爆発するかわからない爆弾みたいですね？あははは・・・

うーん、それにしても部屋酷いですね？こういうのをパパッと魔法で直せないんでしょうか？

しよーくん？お掃除とか物の元通りにする魔法とかないんですか？

「いや？あるとしても俺はしらねえ。だいたい俺の習っている一般的な魔法ってのは、杖とかの触媒を通して魔力を周りの精霊に渡して、詠唱することで魔法を発動させてるんだよ。火とか水と光とか

」

精霊がいるんですか？

ふむ？わざわざそんなことしなくても頼めばいいんじゃないんです

か？

例えば、精霊さんお水くださいっ……

放課後遅くに帰宅しようとしていた学生たちは、学園長室の窓から大量の水が流れ出るのを目撃した。

第七話（後書き）

ありがとうございました。

第八話（前書き）

相変わらず短いですが、とりあえず載せます。

第八話

放課後の学園長室、そこはもはや見る影もなくなりつつあり、グシヤグシヤのビチョビチョでした。

空気が再び悪くなり、心なしか先ほどより大きな怒りマークがみえます。

「……………ほう、精霊にお願いしたとな？」

はい、そうなんです……出来心だったんです……

だから、その……えっと……

……許して？

(ゴン！) あでっ！？　しょーくん、痛いですよ？

「反省しろ。」

ごめんなさい！

「学園長、もしかしたら白峰君は精霊に好かれているのではないでしょう？それもとてつもなく。」

「うむ。そう考えた方がいいかもしれん。（しかし、本当にどうしようかの？あやつに知られると面倒じゃし・・・いや、いっそ押し付けるのもありかもしれん。）」

「とりあえず、今日はいったん帰しましょう。風邪を引かせても問題ですし・・・なんでしたら、翔と一緒に私が様子をみますよ？」

え？ い、いいんですか？ 私、迷惑ばかりかけましたけど？

そして学園長！ 何やら妙なことを考えていませんか！？

「はは、確かに大人げなく怒ったりもしたけど・・・困っている生徒を助けるのが仕事柄だからね。気にしないでいいよ。」

「ま、お前なら俺もいいよ。ただし、もうちょっと気をつけろよ。」

あ、ありがとうございます！

しょーくんもありがとー！さすが我が心友だね！

「ふおっふおっふお、君たちは早く帰りなさい。ああ、保健室に寄ってタオルを借りるといい。白峰君、くれぐれも魔法とかについて誰かに話さないようにの？」

はい、ありがとうございます。それじゃあ失礼します。

「失礼します。」

そうして、やっと私たちは帰宅しました。

翌日、心配した千雨ちゃんに怒られました・・・

「聞いてんのか！」

はい！聞いてます！

第八話（後書き）

ありがとうございました。

第九話

どうにかこうにか千雨ちゃんを落ち着かせ、私は気づきました。

そう、千雨ちゃんもこの土地がおかしいことに気づいていて、周りのみんなと意見が衝突しがちだったんですね。

私たちがいたから結構ましになりましたけど、独りだったら人間不信になっていたでしょうね？

うわゝ、皆から嘔吐きとか言われると思うとぞつとしますね・・・

しかも自分も周りも子供ですからね・・・良くも悪くも

気づいてしまったからには、その不安を取り除いてあげたい。

子供を守るのは大人（笑）の役目ですからね！

とりあえず、教えるかどうかをししょー（しょーくんの師匠——森^{もり}里^{さと}景^{けい}一^{いち}先生、バイクが趣味——のこと。私もそう呼ぶことにしました。）に相談することにしました。

ししょー、実は私の友達に昔から麻帆良が変だって気づいてる子が一人いるんですけど、魔法のこと話しちゃダメですか？

「何だつて？・・・ああ、翔が話してた子だね？　翔？　その子に認識障害はやっぱり効いていないのかい？」

「はい。　前にも言いましたが千雨には効果がないみたいでした。」

あら、先にそういう話してたんですね？

「うん。　とりあえず、君たちがいれば大丈夫かな、と思って黙っててもらったんだ。　下手に教えると色々和不味いからね。」

出来れば教えてあげたいんですけど？

千雨ちゃんは常識がしっかりしてる分、時々辛そうにしていましたから・・・

「あゝ、ごめんね。　気が回らなくて。　君は大丈夫だったのかい？」

「そうだよな。　お前大丈夫そうだから、千雨も大丈夫かと思ってたぜ。」

む！　しょーくん、それはいけません！　紳士（笑）たるもの女の子を大事にしないと！

「いや、千雨が弱み見せんのは大抵お前にだから。　それに俺は男女平等だ。」

「ははははっ。　うん、教えて大丈夫だよ。　学園長には俺から伝えておくから、その子の不安を解消してきてあげて。」

はい！ ありがとうございます！ では早速・・・

そして、千雨ちゃんに電話をかけようとすると、

「明日にしたらどうだ？ 今からじゃ遅くなるだろうし・・・それに、お前は早くその体質？をどうにかしないとな。」

ぐっ、そうでした。 昨日は大参事でしたもんね・・・

「それじゃ、さっそく試していこうかな。 まずは魔力を操作してみようか。 本当なら、杖をもって初心者呪文を唱えて練習しているんだけど。 君の場合、魔法使いになるのが目的じゃないし、下手に呪文唱えると何が起きるかわからないもんね？」

す、すみません。

しょーくん、苦笑いしないでください、距離を取らないでください。

「いや、昨日お前のそばにいたから余計に、な？」

すみませんでした！

まあ、ぼちぼち始めましょう。 こういうのは切り替えが大事です！

魔力、魔力と。

目を閉じて、静める、鎮める、沈める。

意識を体の内側に。

周りの音が消えていき、心臓の音が聞こえ、血の巡りを感じる。

体の中心ではなく、奥へ、奥へと。

意識を、感覚を這わせて、広げて、探っていく。

・・・ある。

力を感じる。

優しく、恐ろしく、温かく、冷たい、力を感じる。

自分に、大気に、大地に、生命に。

それに触れる。

そしてそれを・・・

「……ん……くん……白峰君!」「……ね……
かね……緋音!」

うおっ! ど、どうしたんですか? 何か問題が!?

「いや、何だか不味い雰囲気だったんで止めさせてもらった。」

「そうそう、お前何しようとしたんだ? すげー寒気がしたぜ……
こう、ヤバイって!」

いや、魔力を操るうにも感覚がわからなかったんで、集中してたんです。それで、自分だけじゃなくて、この空気中とか大地にある何かなにかがそれだろうなと思って、こう、集めようと……

「か、感じただけじゃなくて?」

ええ、あとちょっとでガツと集めて取り込められそうでしたよ?

あれ? 何でそんな理解不能なものを見る目で私を見るんですか?
普通じゃないんですか?

ちよっと! ししょー、考え込まないで!

「白峰君、君は……」

はい! 何でしょうか!?

「君は、魔法使いになるべきかもしれない。」

・・・え？

第九話（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1159y/>

それなりに上手くいっていた人生でした。

2011年11月4日10時11分発行